



田島 征彦 ④

絵と文

黒猫とビーグル犬を連れて丹波の山奥からおのころ島(淡路島)へ引越してきた。黒猫は間もなく盛りがついて、帰って来なくなった。ビーグル犬もマムシにかまれて弱ってしまい、死んでしまった。

すると、東京の末娘

のかが子が、引越して飼えなくなった猫をうちへ送ってきた。猫が飛行機で送られてきたのだ。関西空港に着いた後は、ボディーに可愛い犬の絵のついたワゴン車で、島へやって来た。高額な輸送費がかかったが、到着したのはなんともみずほらしいサビ猫。瘦せて、ハイエナのよくなげない顔をしている。でもかの子が付けた名前はロタンの恋人「カミーユ」。都会育ちゆえ、家から外へ出てこない。土の上へ下りようとしてもしないお姫さまだった。

そんなある日、家の下の道路から、てのひらに乗りそうな子猫が、か細い声で鳴きながら、家の中まではい上がってきた。目は見えていたのだから、ほくのスポンをよじ登り、カミーユにも絡みついている。キャットフードの皿を見つけて、むしゃぶりついた。腹の皮に、キャットフードの形が浮き出るほど、詰り込んでいる。子猫のくせにカミーユと同じだけ食べて、3カ月もするとカミーユより大きくなった。

「ノラ」と名付けた。ノラが来てから、カミーユは積極的に生き始めた。外へ飛び出しては、小鳥やネズミをくわえて戻り、浴室のマットの上で平らけてしまふ。お客さんにも愛嬌を振りまき、にじり寄っていくのだが、客はびっくり。「この動物は何ですか? 何を飼っているんです?」。すぐには猫と分かってもらえない風貌なのだ。

一方ノラは、立派なトラ猫に育つてなかなかの美人である。しかし、カミーユと正反対に引きこもりで、人が来るとすぐに隠れてしまふ。家の中にいて、いつ見てもキャットフードを食べていると思ったら、メタボ巨大猫になってしまった。カミーユはかなり遠くまで遊びに行くようで、2、3日帰って来ないことがある。車にひき殺されてはいないかと心配していると、朝帰りして気付かぬ間に洗濯機の上のカゴの中で眠っている。性格の全く違う2匹の猫は、仲良くはないが、どこにか共存して、老夫婦の相手をしてくれている。

(絵本作家)

毎月最終火曜日掲載

